

前 櫓 の 中 世 墳 墓

——加茂町出土中世墓の検討——

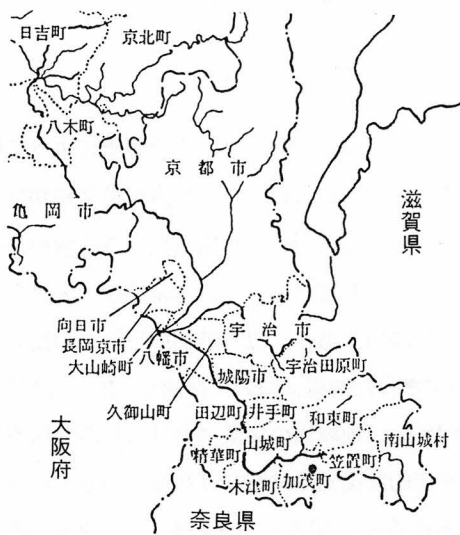
戸 原 和 人

1. はじめに

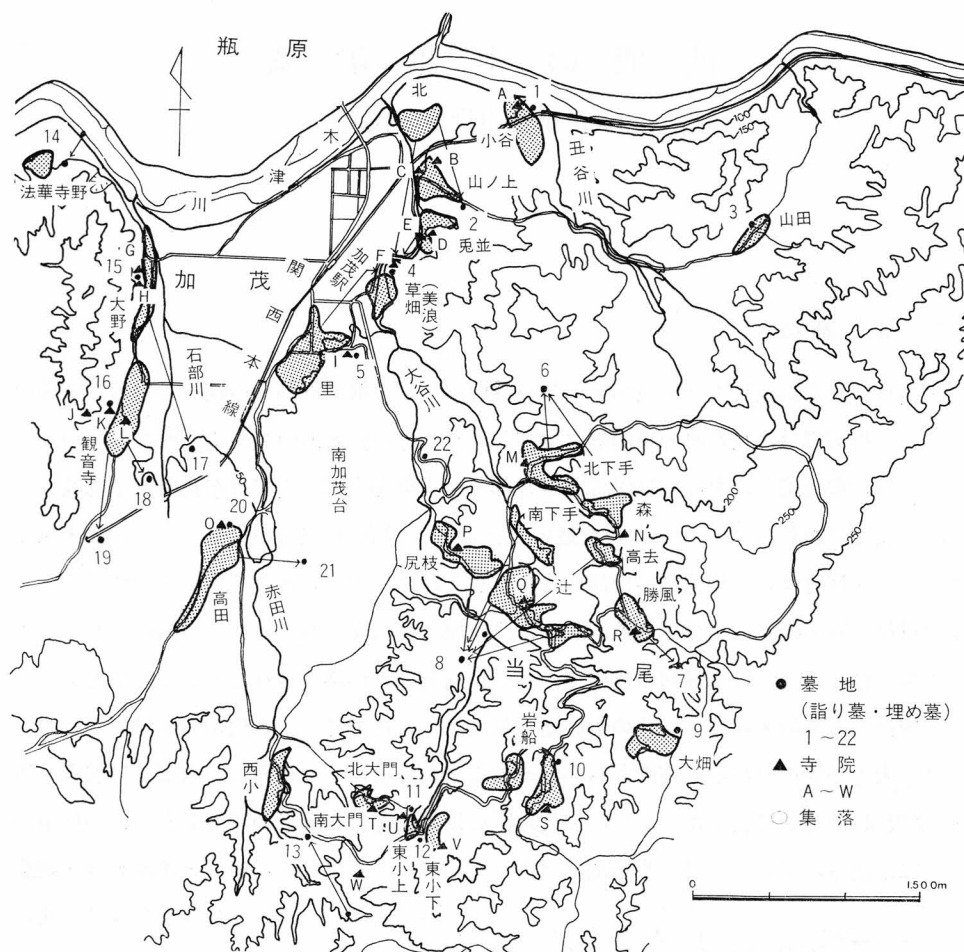
京都府相楽郡加茂町大字尻枝小字前櫓55番地に中世の墳墓群が今も残っている。遺跡の所在する相楽郡は、京都府の東南端に位置し、かつての山城国の最も南に所在している。北部は綴喜郡と接し、東部では滋賀県甲賀郡・三重県阿山郡、南では奈良県添上郡及び奈良市と接しており、古代よりその交通の要として、文化・経済の交流のさかんな地域であった。加茂町はこの相楽郡のほぼ中央に位置し、町の中央北寄りを東から西に貫流する木津川によって南北に二分される。北部は旧瓶原に概ね含まれ、古代には恭仁宮や国分寺が建設された。又、日本最初の貨幣である「和同開珎」が鑄造されたのもこの地であり、一時期日本の政治・経済・文化の中心地となったところである。古代から中世にかけ当地には東大寺や興福寺などの荘園がおかれそのことが文献により窺える。南部では加茂・当尾(小田原)の各地に荘園がおかれ、加茂地区には東大寺や興福寺の荘園も多く、領地争いの記録が残されている。又、当尾地区は古くは小田原と呼ばれ、岩船寺・浄瑠璃寺・随願

寺など数多くの寺々が建ち並び、後に「山田」と呼ばれ、現在当尾と通称されている。

前櫓墳墓群は、このうち当尾地区に属し、現在の府道木津大柳生線が木津から当尾に入る所の丘陵の上に所在する。幾度にも亘る道路の拡幅のため丘陵部に残る遺跡はかなり損なわれており、府道路面上では墳墓に副葬されていたと思われる中国龍泉窯で焼かれた青磁の破片を採取した程であった。昭和56年に京都府道路建設課によってさらに府道の拡幅工事が計画され、丘陵を切り崩すこととな



第1図 前櫓中世墳墓位置図



第2図 相楽郡加茂町，木津川以南の墓地と寺，集落

ったため丘陵端で発見されていた古墳を発掘調査することとなった。この調査によって墳丘の東裾部から中世墓が新たに発見され、調査によって13世紀末から14世紀後半にかけて営まれた墳墓群であることが判明した。^(注1)近年の発掘調査においては開発に伴う事前の調査が殆どで調査終了と共に破壊されてしまうことがしばしばであるが、本遺跡が地元識者などの努力によって、保存されることになったのは幸いである。以下前掲中世墳墓の検討を行うにあたってまず、2. 調査の経過と明らかになった遺構について概観し、3. 当地域における中世の墓制を研究する上で必要と思われる、地域内の集落における集落共同墓地(惣墓)のあり方を検討する。同時代における平面的な復元作業がなければ、部分的に検出された遺構を理解することは不可能であると考えからである。又、4. その後に当地域の置かれた社会的・政治的な状況についても検討しなければならないと考える。

表1 相楽郡加茂町、木津川以南の主な寺

記号	寺名	所在地	創建・中興	宗派	備考
A	大願寺	大字北・小谷下	慶長7年(1602) 創建	真宗	京都本願寺末・僧観了
B	現光寺	大字北・山ノ上	元禄10年(1697)	真言宗	京都智積院末・明治12年安楽寺を合す。
C	葉師寺	大字北・山ノ上	宝永2年(1705) 開基	浄土宗	京都智恩院末・然誉上人開基
D	燈明寺 (東明寺)	大字兎並	天平7年(735) 創建	(現)日蓮宗	行基・真言(浄瑠璃寺末)→天台→日蓮(真暁)
E	(成徳院)	大字兎並	—	天台宗	兎並公民館東へ在・常念寺へ合す。
F	西光寺	大字美浪	—	天台宗	里, 常念寺末
G	大念寺	大字大野	寛政(1786)以前	融通念仏宗	摂津, 大念仏寺末
H	西明寺	大字大野	大宝元年(701) 創建	真言宗	浄瑠璃寺末(大和円城寺末)・行基, もと葉師院という。
I	常念寺	大字里	正徳2年(1712)	天台宗	伊賀西蓮寺末・永正6年銘五輪塔
J	(観音寺)	大字観音寺	—	華嚴宗	地藏院西奥山中へ在, 地藏堂→地藏院となる。
K	地藏院	大字観音寺	享保12年(1727) 再建	浄土宗	京都智恩院末・僧寂嘗
L	興招寺	大字観音寺	安永2年(1773) 中興	天台宗	里, 常念寺末・僧俊和
M	大福寺	大字北下手	寛永7年(1630)	真言律宗	下手村惣中により建立・金蔵院末
N	(神宮寺)	大字森・ダラニ田	—	—	現八幡宮社務所地に在・仏像→金蔵院
O	高田寺	大字高田	奈良時代	真言宗	高野山金蔵院末
P	金蔵院	大字尻枝	長元8年(1035)	真言宗 真言律宗	西小法雲院末・僧意教
Q	宝珠寺	大字辻	—	禪宗	久世郡興聖寺末・尼寺
R	(観音院)	大字勝風・出垣	—	—	勝風公民館の地へ在
S	岩船寺	大字岩船	天平元年(729) 創建	真言律宗	大和西大寺末・元興福寺一乗院末
T	(阿弥陀寺)	大字北大門・堂畑	—	—	現大門集会所の地へ在
U	釈迦寺	大字東小・田原	—	—	
V	(東小田原隨願寺)	大字東小・田原	1013頃	真言宗	頼善建立, 興福寺に寄進
W	浄瑠璃寺 (西小田原寺)	大字西小	天平11年(739) 創建	真言律宗	大和西大寺末・元興福寺一乗院末

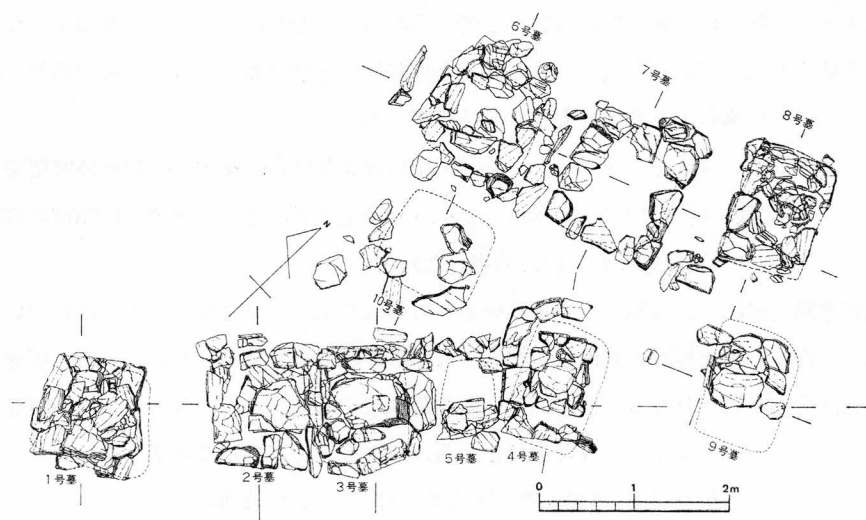
2. 中世墓の発見と調査(第3図・付表3)

昭和56年, 京都府道路建設課により一般道木津一大柳生線(旧柳生街道)の拡幅工事が計画され, 丘陵部を削り法面^{のりめん}にするため, 頂部に所在する古墳(前櫓2号墳)が破壊される可能性が出た。このため(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターに緊急調査の依頼があり, 昭和56年12月より発掘調査を実施した。この古墳は直径約19.0m, 高さ約3.0mを測り, 内部主体のみならず, 墳丘及び外部施設もいたって保存状態が良好であった。調査は墳丘全体に及び, 墳丘裾部をめぐる列石の調査によって, 丘陵東側へ伸びる丘陵東斜面に中世

表2 相楽郡加茂町、木津川以南の主な墓

番号	墓地(小字名)	集 落 名	墓 標 (年 代) 備 考
1	(刃 一 谷)	小・谷下・小谷上	新しい。
2	(鷹 塚)	北(村)・山ノ上	西光寺墓地より分かれた。
3	(岩 尾)	山田	江戸中期からの新田開発村, 里・兎並・北村
4	西 光 寺	里・兎並・北村・南(美浪)	五輪塔(大型) (鎌倉中)
5	(奥 畑)	里	五輪塔(小型)他
6	大 倉	南下手・森	五輪塔(中型)他 (南北朝～室町初)
7	(ワ タ ラ ヘ)	勝風	地藏石仏, 永禄8(1565)銘 (室町末)
8	千 日	尻枝・辻・南下手・高去	十三重塔・五輪塔(小型)他(室町中期以降) (永仁6(1298)銘)
9	(ヤ ケ 谷)	大畑	石塔, 永正16(1519)銘 (室 町)
10	(石 堂)	岩船	五輪塔(大型)→岩船寺へ (鎌倉末)
11・12	芋 谷・東 谷	東小	五輪塔(大型)他 (鎌倉末)
13	(長 尾)	西小	五輪塔(大型)他 (鎌倉末)
14	(植 田)	法花寺野	
15	(大 野)	大野	西明寺に永仁3(1295)銘の笠塔婆 (鎌 倉)
16	(中 貝 戸)	観音寺	道沿の堂内に地藏, 応永6(1399)銘 (室町)
17	(堂 ノ 上)	大野	大野 埋め墓
18	(大 田 山)	観音寺	観音寺 埋め墓
19	(西 野 上)	観音寺	観音寺 埋め墓
20	(下 平)	高田	五輪塔, 永仁3(1295)銘 (鎌 倉)
21	(東 山)	高田	高田埋め墓
22	(前 棚)	一	凝灰岩製, 五輪塔・宝篋印塔 (13C末～14C後) (鎌倉～室町)

墓10基を検出した。調査は部分的であり、今後調査を行えばさらに東へ伸びる墓域を確認できる可能性も残っている。また、前項でも述べたようにすでに何基かの墓は破壊されてしまったと考えられる。調査は、表面を被う雑草や樹木を伐採した後、腐葉土を取り除き、野面石による墓の基壇を検出した。何層にも敷かれた板石を実測しながら取りはずし、復元する事を想定して各石にはペンキにより番号を付した。当墳墓群は、基壇の埋没の状況により土葬墓と判断された。埋葬施設確認のための断ち割りをおこなうこととし、7号墓、6号墓、8号墓と掘り下げた後、4号墓から1号墓、10号墓を調査した。この間、奈良大学水野正好氏や奈良国立文化財研究所田中琢氏の来訪があり、学問的な指導を賜った。調査の終了した墓より順に埋め戻し、石組みの復元を行った後、全体の写真撮影を行い昭和



第3図 前櫛の中世墳墓群配置図

57年2月に作業を終えた。当遺跡が保存されるということを聞かされたのは京都府知事選挙も始まろうとしていた頃で、府広報により公表された事を地元の方々から聞かされ、将来、地元での保存、活用がなされるであろうと心から悦んだ。

墳墓群の立地 本墳墓群の所在する加茂町大字尻枝は、北流して木津川に注ぐ大谷川水系によって開削され、溪谷が平野部に口を開け、扇状地を形成する起点となる位置にあたり、遺跡は現河道東北20mに、河底との比高差約23m、標高89～90mに立地している。

墳墓群の造営 前記前櫛2号墳の東側丘陵斜面上に営まれており、尾根の主軸に並行して形成された1群と、1段低い位置で古墳裾部から地形に制約されながら北西に伸びる1群とに分けられる。これらの墓は外辺を接したり共有したりしながら整然と並んでおり、お互いが切り合う事はない。この事により、これらの墳墓が埋葬施設でありながらも個々の占地在り認識されており、先に営まれた墓を破壊することなく継続的に営まれた事が知られる。

上部の構造 墓はそれぞれ石組みによって区画しており、野面積みであるが、板石などは適当に割られたものが上面の敷石として使用されている。検出された基壇は、火葬墓と土葬墓では幾分構造が異なるように思われる。すなわち、火葬墓においては、遺存状態のよい1号墓のように1段の基壇によって造営されているのに対し、土葬墓では、3、4、9号墓に顕著のように二重に区画されており、そのため二段に復元しうることである。それぞれの墓はさらに供養塔を設置するための台石を据えていると考えられるので、火葬墓

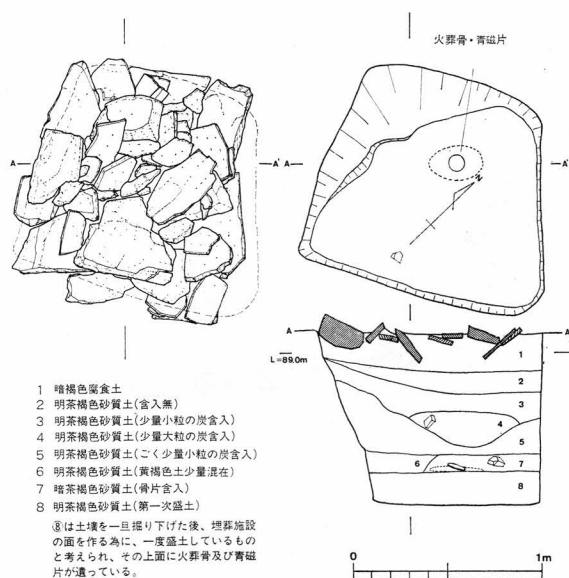
では二段、土葬墓では三段の基壇が築かれたことになる。この差異は、地下施設のありようによって規制された結果ではないかと考えられる。土葬墓においては火葬墓よりかなり深く墓壇を掘削しており、埋められる死者と火葬骨の体積の差も大きい。その結果、埋め戻した時の土の盛り上りもより大きくなるはずである。

当遺跡の墓壇の容積を計算すると、6・7・10号火葬墓壇が $0.36\text{m}^3\sim 0.59\text{m}^3$ の容積をもち(1号墓は特に深く掘られたため 0.8m^3)、3・4・8号土葬墓壇では $1.08\text{m}^3\sim 1.23\text{m}^3$ の容積となる(5号墓と9号墓は条件が悪いため省いた)。

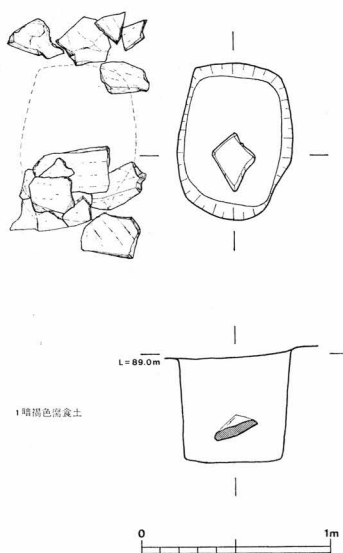
埋葬施設 確認した10基のうち墓壇をもつものは9基で、2号墓としたものについては墓壇をもたず、地上標式の野面積基壇と宝篋印塔の残欠のみであった。供養塔と埋葬墓が同一画区内に設置された特殊例である。埋葬墓9基を概観すると、各々の墓は石組を取り除くと、ほぼ同一のプランの墓壇を検出する。土葬墓にあってはこのような事例に多く接するが、火葬墓の場合その場で火葬でもしない限り大きな墓壇は必要でなく、蔵骨器が入る程度の小穴を穿っているのが通例である。本遺跡中、火葬墓と確認できたものは1・6・7号墓で、10号墓はその形態により火葬墓であろうと判断した。火葬墓の墓壇はいずれも地上標式とほぼ同一プランで掘られており、深さが浅いという点を除けば土葬墓と識

表3 墳墓一覽表

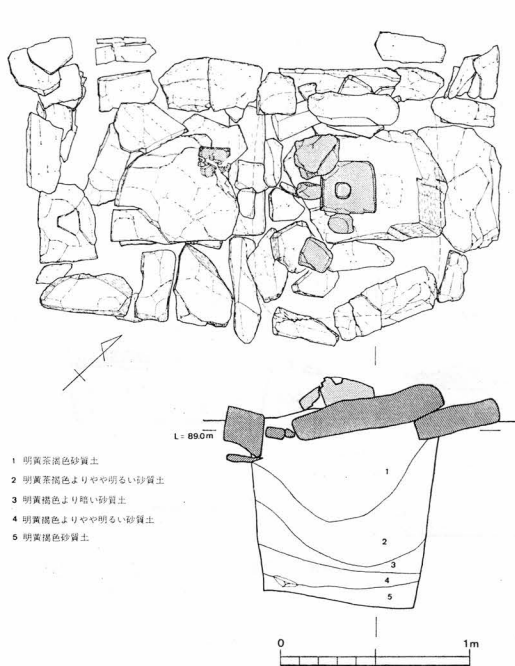
墓 No.	地上標式	石組規模 (m)	墓壇規模 タテ×ヨコ× 深さ (m)	埋葬形態	備 考
1	?	$0.97(1.2)\times 1.15(1.2)$	$1.1\times 1.18\times 0.9(0.7)$	平面台形の掘形をもつ火葬墓	一旦墓壇を深く掘った後 0.2m 埋め戻し、火葬骨を収める。和鏡・青磁片
2	宝篋印塔	1.4×1.2	—	—	1辺 0.6m の宝篋印塔の基礎とその他の破片が散布
3	宝篋印塔	1.45×1.45	$1.0\times 1.2\times 1.0$	平面正方形の土葬墓か	0.58×0.8 の基礎の上に宝篋印塔の台座、他各部の破片が散布
4	五輪塔	下段 1.6×1.2 上段 0.85×0.7	$1.35\times 0.9\times 0.85$	平面長方形の土葬墓	1辺 0.4m の基礎の上に五輪塔の地輪、土葬墓、短刀
5	?	1.3×0.7	$0.85\times 0.6\times 0.57$	平面長方形の小型土葬墓	No. 3, No. 4の各辺を利用した小型墓。墓壇内に石を入れる。
6	五輪塔	1.5×1.4	$1.1\times 1.1\times 0.3$	平面正方形の火葬墓	付近に五輪塔の水輪他各部片が散乱、火葬骨青磁碗、短刀
7	五輪塔か	1.5×0.8	$1.2\times 1.2\times 0.41$	平面正方形の火葬墓	6号墓と軸を並ぶ、火葬骨、青磁碗、漆器、蔵骨器、皿、短刀
8	?	1.2×1.0	$1.4\times 0.93\times 0.83$	平面長方形の土葬墓か	
9	五輪塔	$1.05\times 0.95+\alpha$	$1.3\times 0.9\times 0.65$	平面長方形の土葬墓か	$0.5\times 0.4\text{m}$ の基礎石の上に地輪が座り、付近に風・空輪散布
10	?	計測不能	$1.1\times 1.1\times 0.3$	平面正方形の火葬墓か	6号墓と軸を同じくする。



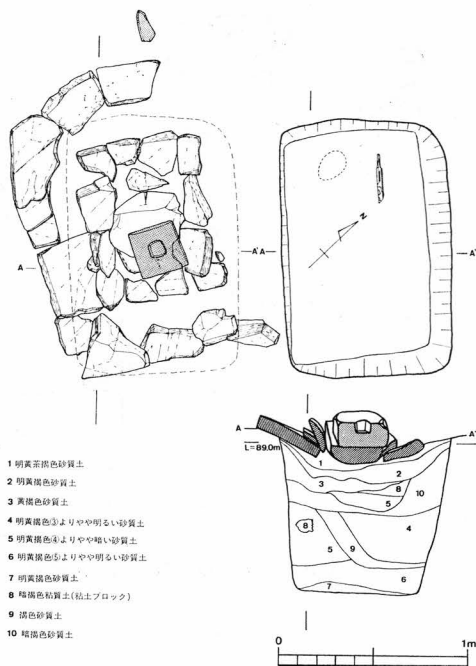
第4図 1号墓実測図



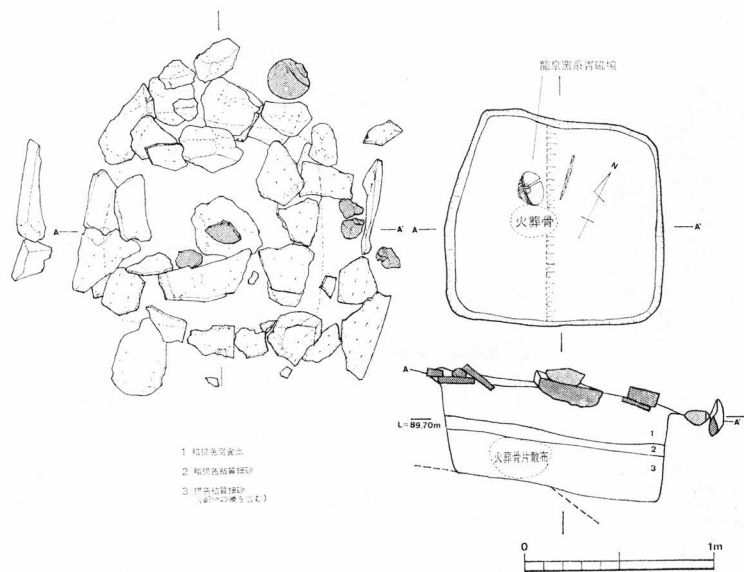
第5図 5号墓実測図



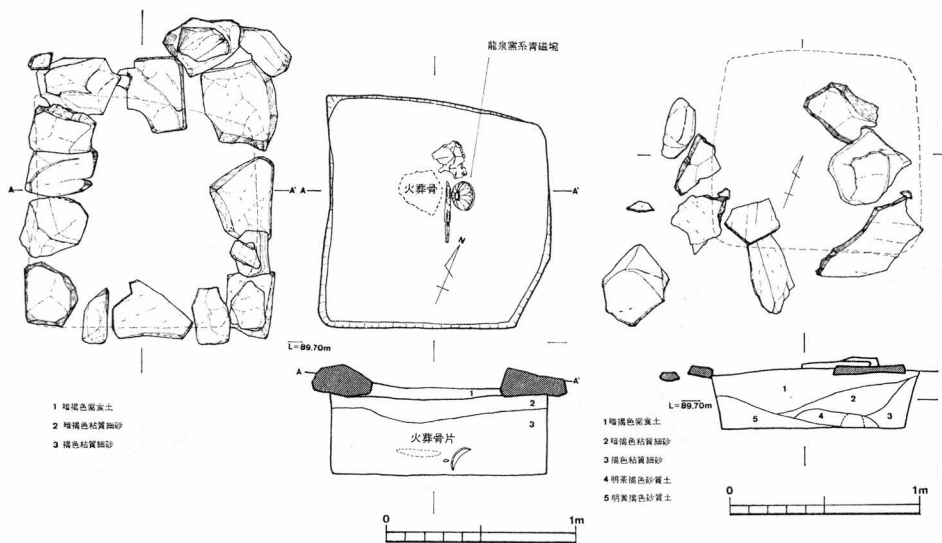
第6図 2・3号墓実測図



第7図 4号墓実測図



第8図 6号墓実測図



第9図 7号墓実測図

第10図 10号墓実測図

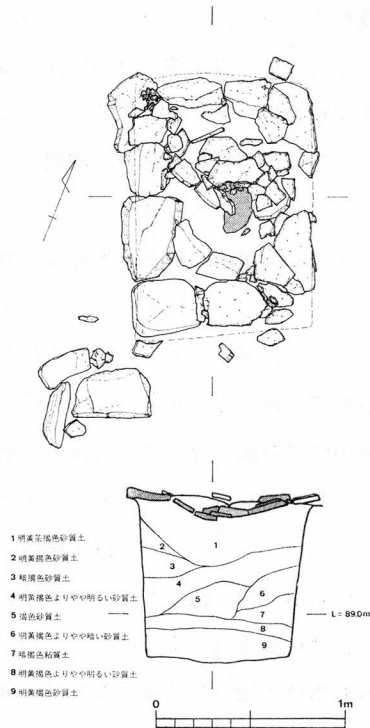
別できない。10号墓は、逆にこの事により火葬墓と判断された訳である。又、火葬墓は、1号墓が少し離れた地点にあるにもかかわらず、すべて墓壇の掘形の軸をほぼ同じくしている事が注目される。これに対し土葬墓では、墓壇をもたない2号と、3号が辺を共有して営まれている以外その墓壇や基壇にこれといったまとまりは見せない。この事は、当墳墓群造営時における墓域の確定、区画の決定に対して火葬墓が先行、もしくはより主導的な位置で営まれた事を示しているのではないかと考えられる。つまりまず、丘陵端部や稜部において火葬墓が営まれ、やや遅れるか並行して随時土葬墓が間を縫うように造営されていったと推定出来る。埋葬時期を決定できる出土遺物は1・6・7号の副葬品のみで、土葬墓では4号墓の鉄刀(短刀)以外出土しておらず、造営順位や年代確定は不可能であるが、以上のように推測してみた。これらの時期は1・6・7号墓出土の青磁碗・和鏡により、13世紀末から14世紀中頃に、遅くとも14世紀後半までに営まれたものであろうと推定される。^(注2)

では、これらの墳墓群が営まれた当地域には、いかなる集落が存在し、墓を営んでいるか、現在地上に残る各地点を検討し、同時代の平面の広がり度で考えてみたい。

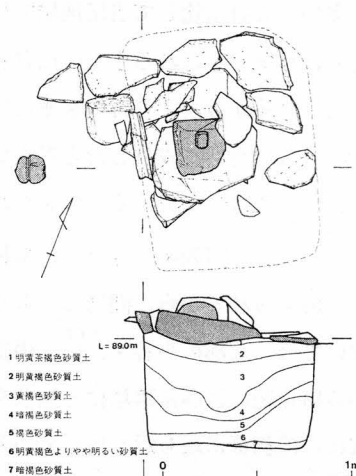
3. 木津川以南の墓と寺、集落

(第2図・付表1・2)

まず設定地域を木津川以南に限った。論点が拡散しないためである。ここでは平野部の加茂地区と丘陵地の当尾地区を取り上げ、その集落・墓域を扱うが、村の成立年代を明らかにする事が困難と考えられるので、当地域に所在する主な寺院を取り上げることにした。



第11図 8号墓実測図



第12図 9号墓実測図

図及び表に掲げたものは主なもので、前柵で出土した五輪塔・宝篋印塔を主にとり上げたが、それを補う石碑等については随時表中に記載した。

まず墓地について検討すると、ここに掲げたものは前柵を含め22箇所ある。この他にも寺内に祀られる新しい墓や、前柵のように埋もれてしまった古い墓などがあるかも知れない。1～3はいずれも新しいもので、2は北地区が後世西光寺墓地より分かれて入っている。又、7勝風区の墓と9大畑区の墓は室町時代後半のもので幾分新しい。14については確認できていない。以上の外は概ね鎌倉～室町期にはすでにその墓(惣墓)が成立していた事がわかる。逆に考えるとこれらの人々を葬った集落がそれぞれの共同体の単位として確立されていたことが窺えるのである。この点についてもう少しふれておくと、幾つかの旧部落の共同墓地となっている西光寺墓地、大倉墓地、千日墓地については、かつてはそれぞれの部落の付近にあったものが集められた事により現在のような姿になったものと解釈できるが、この点については本稿においては立ち入らない事にする。これらの墓地に銘の入った石造の塔や仏が多くなるのは16世紀に入ってからで、各村毎の墓に五輪塔や板碑に梵字と共に刻まれるようになる。13世紀から14世紀にかけては磨崖仏に多く銘が刻まれ、地域も当尾が優位にある。これは、次に述べる寺院との関わりによるものであろう。

次に、各地区(村)に所在する寺院についてみると、新しく開かれた宗派に属する真宗・浄土宗・融通念仏宗の寺々は創建も新しい事が知れ、平野部及びその周辺部の加茂地域が多い。これに比して当尾地域では、岩船、西小・東小に奈良時代から開かれた寺々が所在し、塔尾と呼ばれるまでのにぎわいをみせている。これに伴い集落も発達していったと考えられるから、より古い宗派に属する寺院の近傍に開けた集落はその寺の創建年代をそう下らない時期に成立したと考えてもよいであろう。ただし、ここに示した寺院の創建年代については寺伝によるものを含むため往々古い時期を示す結果となっているかも知れない。しかし、密教系の寺院は、本稿で問題にしたい13世紀～14世紀には確実に成立していたと考えられるから、問題にしなくてよいだろう。以上のことから、木津川以南の地域においては、北部の小谷・山田^(注3)、中部の勝風・大畑の集落を除いたすべての集落が、13世紀から14世紀には各集落単位で惣墓を確立していたと推定することができる。

次に、前柵墓に最も近く接している尻枝地区について、もう少し詳しくふれてみたい。尻枝区には付表に載らなかった寺院が三箇寺もある。すなわち江岡寺、阿弥陀寺、西光寺^(注4)の三寺で、今はその所在さえ明らかでない。江岡寺と西光寺は真言宗で、仏像や本尊は金蔵院へ移されたという。又、阿弥陀寺は大念仏宗で、南都法徳寺の末寺であるといわれるが、いずれの寺も詳細は不明である。尻枝の集落は、当尾の中では比較的世帯数の多い村であるが、小さな谷に囲まれた狭小な地で、現在でも22～23軒の家が建っているにすぎな

い。現存する金蔵院は、寺伝によると西小田原(浄瑠璃寺)法雲院の末寺で、長元8年(1035)浄瑠璃寺にいた意教上人に、後一条天皇が唐から渡来した十一面観音を授け、上人は庵をむすんでこれを秘仏としたという。これが金蔵院の前身である観音堂の創建とされている。このように当尾には別院や庵のたぐいがあちこちでむすばれ、その門前には集落が生まれていったものと考えられるが、尻枝の村もこの1つであろう。尻枝の墓地は付表で示したように現在は辻の千日墓に移されている。集落独自の古い墓地については、現在の所確認していないので、前柵墓がそれに当る可能性がないとはいえない。

最後に、当地域における墓制についてみてみよう。当地域は民俗学でいうところの所謂両墓制の地域である。それを最も現在まで残しているのは、表2で示した17・19・21の大野・観音寺・高田の埋め墓の例である。これらの集落は現在でも川や谷を挟んだ遠いところに遺骸を埋葬している(土葬)。加茂の東部では、早くから西光寺が菩提寺として各集落の共同墓地となっているため、その様子を窺うことはできないが、当尾においては幾分両墓制の名残りを留めている。辻では集落のそばに墳墓堂が建ち、千日墓地の北には詣り墓が集められている。又、西小の(長小)墓地では、詣り墓の裏に埋め墓が隣接して設けられている。両墓制と呼ばれる墓形態の成立や成因については諸説があるところであるが、当地域がこのような墓制に基づく墓を営んでいた事は前記の例からも明らかである。

前柵墓が埋葬墓上に供養塔を造立しているのは、14世紀代には一般的にみられる現象である。おそらく、この地域に両墓制が行われる以前の状況を示しているであろう。

さらに前柵墓が特異なことは、地上標識である五輪塔・宝篋印塔が凝灰岩製であることである。当地域内で凝灰岩を用いた塔・碑の例としては、現在木津川北岸河原地区内の西念寺墓地に立つ天正18年(1590)銘と、慶長14年(1699)銘を持つ板碑、及び海住山寺墓地内にある宝篋印塔のみである。^(注6)これらはみな時代も下り、兵庫県姫路市周辺に産する所謂竜山石(溶結凝灰岩)であるといわれる。当地方の石造品はほとんどすべて周辺地域でふんだんに採れる花崗岩製で、一部砂岩製のものがあるのみである。前柵の凝灰岩製石塔を観察すると雲母が多く、石英や長石が含まれガラス質が残っている。この凝灰岩を産出する地質帯としては二上山がまずあげられる。又、近くでは奈良市東部の三笠山の奥地及び京都府の宇治田原町が考えられる。しかし、実際に凝灰岩を切り出す地域としては古代以来大和に凝灰岩を供給し続けている二上山麓を考えるのが妥当であろう。^(注7)

4. 前柵墳墓再考

第3項で検討した21箇所の墓地は、何れも大型の中心墓塔をもち、その周辺に小型の五輪塔や宝篋印塔によってまつられる墓が営まれるのを常とするのに対し、前柵においては、

中心となる大型の墓塔がみいだせないことや、供養塔がいずれも凝灰岩製であったことなどが特に注目される。このことは、前記以外の他の墓地において、追葬の為の掘り起こしを行った際も、凝灰岩製の供養塔が出土した例は現在までには1点もないことから強調出来ることである。

また、「木津町史」によれば、1296年(永仁4)六波羅探題により山城国の悪党を探索する命令が、大和・山城・伊賀3国に出された記事がみられるがそのなかに、加茂を本拠とする慈法、十郎太郎入道、春日兵衛、観音寺に住む一音次郎入道、加茂と大和の福智荘をまたにかけていたと思われる三位坊などの名がみられる。この他にも、おそらく山田地区を本拠としていたと考えられる者の名もみえ、幕府から山城国の悪党として手配された20名中、加茂町域だけで6名が名をつらねている。^(注8)これらの在地土豪と考えられる人々は、その名からして殆どが僧侶の身分にあったと考えられるが、このことは、奈良を中心とした寺社勢力の影響力のもと、加茂地域にあっても、寺の支配力が各荘園に及んでいたことを窺わせるものである。

以上のような検討をした結果、前柵の墳墓を営んだ人々は、あるいは僧侶の階層にあった人々ではないかという事を考えるに及んだ。当地域の僧侶階層が、鎌倉時代後半の混乱した社会状況にあって、一定地域に支配力を及ぼし、交易権を所有していたと仮定すれば、二上山から凝灰岩を購入することも可能であったと考えられるからである。墓碑に銘も刻まれておらず、その被葬者を明らかにする事は全く不可能と考えられるが、小地域内における中世墓制の研究の1つの方法として検討を加えてみた。最後に京都府下で検出された中世墳墓群の中にあって副葬品として輸入陶磁器を埋納した例が97遺跡中^(注10)9遺跡で、全体の9%に満たないことにより当墳墓の特殊性を強調して結語としたい。

(戸原和人=当センター調査課調査員)

注1 戸原和人・中塚 良「前柵2号墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊-4 1982)
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注2 森田克行「大阪府・岡本山古墳群」『歴史手帖』11 名著出版 1986 岡本山古墳群C地区では墓地造成面が上下2面あり、上層は火葬墓に五輪塔を伴い、下層は土壇墓を主体とし、上層は14世紀代、下層はおおむね13世紀代と推定されている。

注3 「わたしたちの相楽郡」相楽郡志刊行会 1959, 167ページ。山田新田の開発は江戸中期である。

注4 「加茂町老人大学 第9集」加茂町教育委員会 昭和60年3月

注5 「京都府相楽郡誌」名著出版 昭和47年他

注6 京都府立山城郷土資料館技師印南敏秀氏に教示をうけた。印南敏秀「南山城の石造美術の概要」(『山城郷土資料館報』第2号) 1984

注7 前柵墳墓五輪塔・宝篋印塔の材質鑑定は京都府立山城郷土資料館技師橋本清一氏の協力を

得た。氏の教示によれば、近傍の三笠山、宇治田原の石材は材質が悪く、過去に利用された例はないという。

注8 「〔木津町史〕資料篇1」 木津町史編さん委員会 1984

注9 「年表 加茂町の歴史と文化」 加茂町史編さん委員会 昭和61年3月

注10 「古代・中世の墳墓について」 第13回埋蔵文化財研究会資料集 1983 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター編、本資料に1959年新たに発見された宇治市隼上り遺跡を加えた。

付記 本稿をまとめるにあたっては、第2図の寺院・墓所・集落を現地踏査する段階で柳沢登紀子氏、資料の確認については戸原照子氏、製図にあたっては田中康夫・木下年史各氏に協力を頂いた。芳名を掲げ感謝する次第である。